HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 105
Issue Date	1939-05-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77650
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part37.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

芒亭書屋談叢

長塚節の「土」が映畫に上演されて偉い人氣を集めて居る由であるが、映畫の「土」は私は未だ見ないのでどんな風であるか知らないが十何年も前に讀んだ「土」の原作から受けた印象は今でも妙に執拗に心の一隅に殘つて居る。貧困と無知とそしてそこに自から醱酵して居る不道德、そんなものの中に喘ぎ〳〵生活して居る農民の生活が極めて纖細な筆致で描寫してあつた樣に思ふ。陰慘と云はうか醜惡と云はうか、凡そ人生の最もみじめな生活がそこに寄せ集めてある樣にさへ思へた。「こんなにして過ぎる人生もあるものかしら?」、日本の農民の生活は皆こんなものだらうか?、その私は漫然とそんな疑問を心に浮べたもの、それを否定する事も肯定する事も出來ないで、不愉快な疑問として其まゝ心の一隅に殘さなければならなかつたのである。

先年前農林大臣の提唱で農民文學の會が催された、當時の大きな話題になつた事は未だ記憶に新らしい事である。それは農村の生活に國民全般の關心をもつと向ける心要があると云ふのであつた樣である。日本の古くからの高い文化の世界からも今日の都市中心のヨーロツパ的な文化の世界からも農村の生活が遠方に置き忘れられて居るかに見えるのか、遺憾に思へるからである。都市の人が農村に關心を持ち、文藝のうにさへも百姓の生活がおどり出す事は國民の總親和の爲に慶賀す可き事は勿論である。

然し今日の日本の農民は「土」の中に見る樣なあんなみぢめな農民ではないと、私は今では確答する事が出來る樣である。勿論廣い農村の一隅には今日でもあんな生活があるかも知れぬが、少くとも一般的にはさうではない。今日の農村の健康な青年達は朗らかに希望を持つて居る。よき農村生活の建設の爲の具體的方策は未だ充分に立てられては居ないけれども、兎に角かくの如き方策を立てんとする意志と希望とを最近の農村青年は持つて居る。それが何よりである。「土」の時代の農民にはそれがなかつたのである。又恐らくあり得なかつたのである。

長塚節が「土」を最初東京朝日に連載し始めたのは明治四十三年彼が三十二歳の時である。彼が岐阜に來遊したのも此年である。思ふに此頃は日本農民が明治以後最も希望を失つた時代と云ふ事が出來るであらう。漸次發展して行く都市の產業に色々の生產部門を次ぎ〳〵に奪はれて自給經濟は全く不可能となり而かも新らしき生產計畫は未だ考へられもせず、全く底氣味の惡い不安を感じて居た時代である。此時代の次にまもなく歐洲大戰時代の日本經濟好況の餘澤によつて農村も蘇生したのであつたが、明治末期は維新以後の經濟事情變動に伴ふ農村の不安がぢりぢりと加はり殆ど此頂點に達した時代であつた。「土」はまさに此時代に現はれたものである。

今日の農村も決し樂土ではない。農民の經濟生活は依然として惠まれては居ない。然今日の農村青年の汗と土とによごれた顏に幾分輝やいて見えるあの眸を見落す事は出來ぬ。若し第二の「土」が今日現はれるならそれは決して第一の「土」の樣にみじめなものではない筈である。

レーモントの「農民」とバツクの「大地」は、共に農民の生活を描いたもので世界文學史上の珠玉である。作者の筆の力もさる事ながら描かれる農民の生活の眞實さが迫力を持つて居るからであらう。興亞聖戰の銃後を護る日本農村青年等の今日の生活は、若し其れを誤りなく描寫するなら、誰が書いても名作になりさうである。